



教師の実践的力量形成の場としての園内研究に関する基礎的研究-実践的知識のインタラクションの視点から-

米田, 麻美

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2006-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3610

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003610>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 2 1 3 】

氏 名・（本 籍） 米田 麻美 （ 鳥取県 ）

博士の専攻分野の名称 博士（学術）

学 位 記 番 号 博い第586号

学位授与の 要 件 学位規則第5条第1項該当

学位授与の 日 付 平成18年3月25日

【 学位論文題目 】

教師の実践的力量形成の場としての園内研究に関する基礎的研究
-実践的知識のインタラクションの視点から-

審 査 委 員

主 査	教 授	稲垣	成 哲
	教 授	船越	俊 介
	教 授	土屋	基 規
	教 授	土井	捷 三
	助教授	鈴木	幹 雄

(別紙様式 3)

(氏名 米田 麻美, No.1)

論文内容の要旨

氏 名 米田 麻美

専 攻 人間形成科学

指導教官氏名 稲垣 成哲

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること.)

教師の実践的力量形成の場としての園内研究に関する基礎的研究

—実践的知識のインタラクションの視点から—

論文要旨

1. 研究の主題

本論文では、これまで研究としてほとんど取り上げてこられなかった幼稚園の園内研究について調査・分析を行なった。園内研究に対する教師の意識調査、園内研究での会話記録を用いた園内研究における教師のインタラクション・パターン記述などの実証的側面から、園内研究を多角的に記述することによって、これまで明らかにされてこなかった園内研究の現状を、園内研究に参加している教師の意識、教師間のインタ

(氏名 米田 麻美, No.2)

ラクション・パターンを中心として記述した。また、今後の園内研究についての研究の手がかりとなるよう、現状の園内研究における実際的な問題点についても同時に考察した。それによって今後の園内研究についての実証的研究にとって、これまでのような概念的なものだけではなく、学校独自のカリキュラム生成により役立場所となるような実践的な知見をもたらす手がかりとなる。

2. 論文の構成

本論文は全体を 5 章で構成して論述した。まず、第 1 章においては、教育学分野における園内・校内研究についての先行研究の研究動向について整理し、次に組織経営学を中心とした隣接・関連学問領域における先行研究についての研究動向を取り上げた。ここでは、園内・校内研究を専門的知識の伝達の場合としての視点から分析していく上で重要となる、野中ら (1995) の SECI モデルや、第 3 章において取り上げる質問調査作成の参考とした永田 (2000) の実証研究、第 4 章において分析枠組みの基礎となる原田 (1999) の「コミュニケーション・アプローチ」などとの関連性を整理した。

第 2 章においては、園内研究についての研究の分析枠組みへの示唆を得るため、小学校の校内研究を対象とし、小学校の校内研究における事前研究と事後研究での会話内容の変化と会話の量的変化についての分析を行なった。

第 3 章においては、園内研究についての教師の意識・捉え方についての意識調査を行なった。これまでの研究から、学校における教師の在籍年数、職位などの要因が園内研究における個々人の教師の活発なインタラクションを阻害している傾向が明らかになっている。そこで、これらの阻害要因を指標とし、教師が園内研究をどのような場として捉えているのかを分析した。それによって、教師の在籍年数、職位の違いによる学校組織についての捉え方の違いを明らかにすることができた。

第 4 章においては、原田 (1999) のコミュニケーション・アプローチという視点をを用いて、園内研究における会話記録から、教師間の園内研究での会話がどのようなインタラクション構造を持っているのかを記述した。それによって第 3 章において明らかになった、教師の在籍年数や職位の違いによる園内研究の場における組織についての教師の捉え方の違いを実証的に示した。

(氏名 米田 麻美, No.3)

第5章においては、第1章から第4章までの結果を振り返りながら、各章における研究の関連性について考察した後、園内・校内研究の今後の展望と課題についてまとめた。

3. 各章における研究と結果の概要

以下においては、各章における研究とその結果について、各章ごとに概要を述べていく。

第1章

教育学分野における園内・校内研究についての先行研究の研究動向について整理し、次に組織経営学を中心とした隣接・関連学問領域における先行研究についての研究動向を取り上げた。

1. 教育学分野における園内・校内研究についての先行研究の概要動向

これまでの園内・校内研修、園内・校内研究についての研究では、分類のフレームワークを提案したものはないが、代表的な研究としては佐竹（1995）が行なったものがある。その中で、佐竹（1995）は、「経験的に指摘されてきたことを体系的に整理することに重点が置かれている」と指摘している。そのうえで、これからは校内研修の展開過程を、教師の職能成長、運営組織などの視点から実証的科学的に分析する試みが急務の課題であるとしている。

そこで園内・校内研究を教師教育の理論的・体系的視点から見直すためには、佐古（1999）の提案した理論的・体系的な教師教育のフレームワークを用いることにした。

この佐古（1999）のフレームワークを適用して、個人的資質育成型、学校改善型の2つの観点から先行研究を取り上げた。まず、個人的資質育成型に分類された先行研究では、1. 教師の職能的成長に関する個人の意識調査研究、2. 教師の職能的成長に関する実態調査研究という2つのタイプに分かれる。次に学校改善型を志向している先行研究は、そのほとんどが学校の組織風土・文化との関係性に関する研究であり、浜田（2003）の研究を除いて、実践的な調査研究はなかった。

2. 関連・隣接学問領域における研究動向—組織経営学を中心とする—

第2章から第4章での研究で用いられた野中ら（1995）によるSECIモデル、原田（1999）によるコミュニケーション・アプローチという概念を取り上げた。SECIモデルとは、端的に言えば、知識創造プロセスである。永田（2000）の質問紙調査は、野

(氏名 米田 麻美, No.4)

中ら（1995）のSECIモデルを応用して作成された。

原田（1999）によるコミュニケーション・アプローチは、組織内のコミュニケーションを分析することによって、組織的な知識や成果をどのように高めていくかというアプローチである。このコミュニケーション・アプローチという実証的手法は、組織における相互作用分析が必要となってくるとの沼上（2000）の指摘から、今後の組織研究において重要となることが明らかになった。

第2章

第2章においては、小学校の校内研究での事前研究と事後研究における会話内容の変化と会話の量的変化について、事前研究と事後研究における会話内容の変化を分析1、事前研究と事後研究における会話の量的変化については分析2として、分析を行なった。その結果、明らかになったのは次のようなことがらであった。

1. 分析1

校内研究の会話記録を一文ずつ区切り、C・A（授業内容依存、かつアクション・スキーマの内容を持つ発言）、not C・A（授業内容独立、かつアクション・スキーマの内容を持つ発言）、C・I（授業内容依存、かつイメージ・スキーマの内容を持つ発言）、not C・I（授業内容独立、かつイメージ・スキーマの内容の内容を持つ発言）、H（ハーモナイゼーション、校内研究の場における教師間のインタラクションを円滑に進めるような内容の発言）の5つのカテゴリーに分類した。次にカテゴリー分けされた校内研究における発言内容を事前研究と事後研究とで数値化して比較した。

1) 分析1の結果

事前研究では授業中の教師の行動などの具体的事象についての知識の表出化がなされていたが、事後研究においては、たとえば子どもの行動の読み取りなどの、よりイメージ・スキーマを用いた抽象的事象についての知識の表出化への表出化される知識の質的变化が伺えた。

2. 分析2

分析1においてカテゴリー分けされた発言の一文あたりの文字数をカウントし、平均値を算出した。算出された発言一文あたりの平均値について、前述の5つの各カテゴリー（C・A, not C・A, C・I, not C・I, H）を指標として数値化し、事前研究と事後研究における発言量についての比較を行なった。

(氏名 米田 麻美, No.5)

1)分析2の結果

事後研究での発言一文あたりの文字数を、事前研究の結果と比較すると、事後研究では、どのカテゴリーにおいても文字数の増加が見られたが、特にイメージ・スキーマに関する文字数がアクション・スキーマに比べて多いことが明らかになった。

事後研究においてイメージ・スキーマを用いた抽象的表現が増えているということから、教師の身体的経験からの知識の表出化が行なわれている、ということが明らかになった。

これらの結果をまとめると、事前研究においては、研究授業に関連した教師の行動、子どもの行動についての知識の表出化が主に行なわれていること、事後研究においては、イメージ・スキーマによる抽象的表現で表出化された教師の経験的知識の表出化が行なわれていることが明らかになった。

第3章

第3章では、園内研究において、参加している個々人の教師間のインタラクションを阻害している要因のひとつである、教師の組織に対する意識に着目し、在籍年数、職位、園の規模を指標として、教師が園内研究をどのような場として捉えているのかについて教師の意識を質問紙調査によって明らかにしようとした。

その結果は、次のとおりであった。

1. 在籍年数について

教師の在籍年数の長さが長くなるほど、『メタファーや行為による組織ビジョン・組織知の共有化』はできていると考えている傾向にあった。

2. 職位について

園長・副園長といった「管理者」群は『メタファーや行為による組織ビジョン・組織知の共有化』について、個人としてはできていると認識している一方で、主任・教諭といった「非管理者」群は反対にできていないと認識していることが明らかになった。

3. 園の規模(クラス数)について

園の規模が2クラス以下の「小規模園」群では、『個人的知識の表出化とその促進、及びその実践的試行』はできていると考えている傾向にあるが、『問題解決のための組織化』については、できていないと考えている傾向にあった。

これらの結果を野中ら(1995)のSECIモデルの視点からまとめると、園の規模が教師

(氏名 米田 麻美, No.6)

にとってコミュニケーションするのに適切な規模であり、『メタファーや行為による組織ビジョン・組織知の共有化』について職位群間において「できている」認識というに差がなくなつてはじめて、SECIモデルという個人の知識の表出化から、共同化のフェーズへ、そしてそこから連結化のフェーズへと移行し、新しい知識(≒幼稚園独自のカリキュラム)が生成できるのではないかと考えられるが、それに関しては今後の研究課題とする。

第4章 園内研究における教師間の相互行為分析

第4章においては、原田(1999)の組織におけるコミュニケーション・モデルを参考としながら、園内研究における参加者の具体的な発話構造を分析した。参加者の具体的な発話構造を実際の園内研究の場面においてどのように教師間の関係性が発生し、それによって第3章で明らかになった園内研究に参加する個々人の教師の認識の差がどのように発生しているのかということを明らかにしようとした。

1.分析1

分析1においては、1回の園内研究に参加している教師の発話を一回ごとに、グラフ上に記録し、教師間における発話の連鎖を1つのグラフとして記述した。この分析によって、園内研究における教師の発話構造を記述し、教師関係性のインタラクション・パターンを明らかにすることができた。

1) 分析1の結果

(1)在籍年数のもつとも長い教師である教師1の発言割合が多く、約30%台であった。また、発言の連鎖は教師2を経由するパターンが多かった。

(2)会話例の内容から、教師1が園内研究における意味合いの「見取り」を参加しているほかの教師に伝えようとしていることが明らかになった。

2.分析2

分析2においては、分析1の結果から、園内研究において翻訳機能の役割を果たしていると考えられる教師2に着目し、教師2の発言に連鎖している前後の1発言との連鎖を一つのインタラクション・パターンとしてとらえ、分析1において立てた仮説である「教師2が園内研究において翻訳機能の役割(トランスフォーマー)をしている」のかどうかについて検討した。

1) 分析2の結果

(1)在籍年数の長い教師と授業者間でのインタラクションが多いということが分かつ

(氏名 米田 麻美, No.7)

た。

(2) 3連鎖の発話構造分析では、園内研究の場において会話が行なわれても、主に二者の発話者間についての会話であり、閉じられた発話構造であることが明らかになった。

分析 1、2の結果をまとめると、組織在籍年数の長い教師らである教師 1、教師 2の発言量が、ほかの教師と比較して比率が高いことが確認された。さらに、園内研究における教師間の会話傾向として、主に発話者間を中心とした会話であり、閉じられた会話構造となっているということが明らかになった。

また園内研究での会話例から在籍年数のもっとも長い教師 1が会話をコントロールする傾向が見られた。しかしながら、幼稚園での園内研究に原田（1999）のモデルを適用して考えると、情報翻訳・知識転換能力を持った教師が、組織内のある教師の発言を、ほかの教師が理解しやすいような言葉に翻訳したり、言い換えたりしているというトランスフォーマー的傾向は特に見られず、教師 1の発言を肯定するような発言が多く見られた。

第5章 総括的考察

第5章では、園内研究の場に関わる教師のインタラクションをとりまく現状について、現在の園内研究の抱える問題やこれからの課題についての2つの観点から、全体的考察を行なった。

1. 園内研究の場に関わる教師のインタラクションをとりまく現状について

組織における在籍年数が長い教師は、その組織特有の『メタファー』や『行為』の意味を過去の経験から暗黙的に習得しており、例えば園長や管理職が『メタファー』や『行為』を交えながら話す組織ビジョンや、同僚が『メタファー』や『行為』を交えながら表現する組織知がさほど違和感なく理解できると推測された。

さらにもうひとつの側面として、組織在籍年数が長い教師ほど、当事者であるゆえに、ほかの在籍年数の短い教師と比較すると、『メタファーや行為による組織ビジョン・組織知の共有化』することへの意識が高いということが示唆された。

2. 現在の園内研究の抱える問題、これからの課題について

組織在籍年数や職位によって認識に温度差があるという傾向は、一般的にどの組織にも見られることであるが、本研究によって明らかになった組織在籍年数や職位によ

(氏名 米田 麻美, No.8)

る園内研究への認識の温度差はできるだけ解消されるべきである。

また、もうひとつの側面としては、園内研究において話し合われている内容に手がある。園内研究では、研究保育について保育中の教師の行動の意味合いや、子どもの遊び・行動の読み取りなどについての、発言する際により経験知が必要となってくるような話し合いの内容となっている可能性があるが、それについては今後検討すべき課題とする。

論文審査の結果の要旨

氏 名	米 田 麻 美		
論文題目	教師の実践的力量形成の場としての園内研究に関する基礎的研究 —実践的知識のインタラクションの視点から—		
判 定	合 格 不合格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教 授	稲 垣 成 哲
	副 査	教 授	船 越 俊 介
	副 査	教 授	土 屋 基 規
	副 査	教 授	土 井 捷 三
	副 査	助教授	鈴 木 幹 雄
要 旨			
本論文は、従来ほとんど取り組まれていなかった幼稚園における園内研究に関する基礎的研究である。具体的には、園内研究に対する教師の意識・認識調査などの質問紙調査、園内研究での会話記録を用いた教師のインタラクション・パターン分析などの実証的側面から、園内研究を多角的に記述し、考察することを目的としている。 本論文は全 5 章から構成されている。第 1 章においては、まず、教育学分野における園内・校内研究についての先行研究の研究動向を整理し、次に組織経営学を中心とした隣接・関連学問領域における先行研究についての研究動向を取り上げている。ここでは、園内・校内研究を専門的知識の伝達場として分析していく上で重要となる、野中ら（1995）の SECI モデルや、第 3 章において取り上げる質問紙調査の項目設定の参考とした永田（2000）の実証研究、第 4 章において分析枠組みの基礎となる原田（1999）の「コミュニケーション・アプローチ」の概念について詳細に整理している。 第 2 章においては、園内研究についての研究の分析枠組みの示唆を得るため、小学校の校内研究を対象とした予備的研究の結果をまとめている。 第 3 章では、園内研究についての教師の意識・捉え方についての意識調査を行なっている。ここでは、学校における教師の在籍年数、職位などの要因が園内研究における個々人の教師の活発なインタラクションを阻害している傾向が明らかにされている。第 4 章においては、原田（1999）のコミュニケーション・アプローチの視点を用いて、園内研究における会話記録から、教師間の園内研究			

での会話がどのようなインタラクション構造を持っているかを記述している。それによって第 3 章において明らかにされた教師の在籍年数や職位の違いによる園内研究の場における教師の認識の差異を会話の中において実証的に示すとともに、園内研究の場を活性化する手がかりとしてのトランスフォーマーの重要性を発見している。

第 5 章においては、第 1 章から第 4 章までの結果を振り返りながら、各章における 研究の関連性について考察した後、園内・校内研究の今後の展望と課題についてまとめている。

本研究の新規性と独創性については、以下のことを指摘することができる。まず、これまで観念的・概念的な議論にとどまっていた園内研究についての研究に対して、隣接学問領域の組織経営論や知識創造論からの知見を援用しつつ、園内研究自体を実証的に分析し、その現状と問題点を具体的に探ったことである。また次に、その中で、園内研究の場においては、トランスフォーマー役をしている教師の存在が園内研究の場の活性化に重要であるという知見が得られたことである。園内研究におけるトランスフォーマーの役割やその育成、園独自のカリキュラムの生成との関係性については、これからの課題となるが、今後求められる園内研究の基礎的な研究領域の道を開いた点で評価することができる。

なお、米田氏は、下記の通り、審査付き学術論文 2 編、審査付き国際会議 1 編を発表しており、氏の学術研究の水準は十分に高いと判断できる。

1. Yoneda, M. & Asada, T. (2002) A Basic Study on the Teacher's recognition of "Ennai-Ken" as a Place for Practical Knowledge Transferring, British Educational Research Association Annual Conference Book of Abstracts, p.186.
2. 米田麻美・浅田 匡（2003）「園内研究における教師の意識に関する基礎的研究—教師の実践的力量形成の場としての視点から—」『日本教育工学会論文誌』第27巻、(Supple.)、pp. 165-168.
3. 米田麻美（2005）「教師教育研究の動向と課題—園内・校内研究を中心に—」『神戸大学発達科学部研究紀要』第13巻、第1号、pp. 21-28.

よって、審査委員全員一致で、学位申請者の米田麻美氏は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。